
ディナータイムは後半戦に差掛かる

mahiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディナータイムは後半戦に差掛かる

【Nコード】

N4439S

【作者名】

m a h i r o

【あらすじ】

イタリアンレストラン『バッカルネ』の人々が語るミステリー

サルティンポッカの巻

「んでえ、その客ん家入ったわけ」

それほど酒に強くないマックスは出来上がっている

「あ、カエデちゃん。ビール追加ね」

レストラン従業員カエデ、苦笑いとも、愛想笑いともとれる笑みで応える

「マスター。ビール追加」

「ババーネ」

カウンター越しにバーテン姿が返事、細身が反転し、ガラス戸15センチ開くとライムとビールを取出し、閉まると同時にビール栓が開く。いつの間にかトッピングされたライムと共にカウンター上に置かれる。

カウンター席は8席。奥のカップル、中央にサラリーマン風の男2人。シート席6つは全て満席の繁盛ぶり。小さなレストランホールで、人の会話が波のように、店内BGMをかき消そうとばかりに活気づいている。奥からは、フランベの音と共に焦がしニンニクの香りが漂う。

「トビー聞いてんのかよ、ったくめんどくせー」

「聞ってるよ、マックス。また、仕事のグチなんだんべ？」

「ハイ、ビール」

「サンキュ、カエデちゃん。相変わらず仕事早いね」

「ちゃんと付けときますから、伝票。」

「ハイハイ、隠しておいたのバレた。シシシ」

とトビー。伝票を釣りジャンの胸ポケットから取り出す。

手ぬぐいを頭に巻き、茶色のニツカポッカ。いかにもとび職ですと言わんばかりのイデタチ。あだ名はそこから付けられたかと思えば、本名：飛田から付けられたのだというから笑える。

イタリアンレストラン『バッカルネ』の日常。ディナータイムは

後半戦に差掛かる。

（4月3日新聞記事より）

昨日午後6時頃、M**市桜ヶ丘町一丁目S・Yビルにて、同ビル所有者の斉藤幸雄氏（56歳）が他殺体として発見される。関係筋からの情報によると、先月二十八日から二十九日の夜にかけて殺害され、同ビルに遺棄されたとのこと。警察当局は、関係者に事情聴取を始めているが、もともと人間嫌いで有名な人物らしく。難航。物取りの可能性も含め、被害者の殺害当日の足取りを追っている。

4月13日 PM9:30

カウンター中央の2人

「・・・だから・・・死ん・・・だ」

「つえ？今なんて・・・？」

「だから、死んでいたんだって。いや、正確に言うところの世に存在しない。もう何年も前から。もしかしたら、実在していたのかさえ怪しい」

サラリーマン風の太った方が重たそうに口を開いた。カウンター横の連れは、返す言葉が見つからず。じっと相手の言葉を待っている。

「その死んだ『男』を、知っているという人間が誰もいない。知っていると思っ込んでいた人間は多かったが、実のところ、別人だった。公的文書、医療履歴、免許証からパスポート。全て真贋つかん唯一引つかかったのは、明治元年産まれ同名。百歳をとうに越してる」

「・・・？では、被害者の男性は、斉藤幸雄氏ではなかったと」

「そういうことになる、捜査も振出。ガイシャの身元も不明。ったく、訳が分からん」

手帳にメモる姿勢のまま。時間が止まる感覚。そこに気配なくバーテンが皿を持ってくる。

「お待たせしました。お客様、コースのメインで御座います」

「ああ、俺だ」

丸く太った手が小さく拳がる。ナイフでメインの肉を器用に切り「マスター。これは何ていう料理だい？」

「はい、本日シェフお勧め、サルティンボツカで御座います。当店では国産サーロインを生ハムで挟み、焼き上げ、白ワイン、ニンニク、ローズマリーで香り付けしております」

今まで、殺人事件の話をしていたとは思えない食の進みように、手帳をもった男は啞然とする。マスターは丸メガネの奥の細目をより細くし、最高の笑顔をつくり

「警部殿のように美味しそうに食していただける様子から、『口に飛び込む』＝サルティンボツカと名づけられたそうです。お口に合いますでしょうか」

「サルティン何チャラは別として、何で生ハム焼く必要がある……訳が分からん。……旨い……うん……まあま……だな」

「有難う御座います。ところで警部殿、お連れのお客様は……」
「ああ、気にしないでくれマスター。ただのライターだ」

「いやー、警部。言い方に棘がある。私、フリーの記者で名前を『只野』と云いまして。よくからかわれるんですよ、ハハハ」

「なるほどです。私もあだ名で『マスター』なんて呼ばれてますが、実のところアルバイトでして。こんな落ち着いた22歳はいない。なんてよく言われます」

「に、にじゅいう、に?」

「はい、桜華大の学生です。専攻は、はん」

ゴホツ、ゴホン。ゲホゲホ……警部のわざとらしい咳払い
「まあ、とにかく捜査は振出だ。鑑識連中も大慌て、前代未聞だ。

正式発表が今頃になってひっくり返るんだからな。頭が痛いよ、まったく。くれぐれも警察の批判を煽るような真似せんでくれよ」

「……そうですか。いやー警部、どうも一筋縄ではいきそうもありませんな。謎の人物がビルのオーナーとして成りすまし、自宅で

殺される……。いやー、組織的な犯罪の二オイがしますね」

「人の話を聞いとるのかね。キミ」

「いやー美味しかったです。プツ、マ『マスター』また食べに来ます」

只野記者は、笑いを抑えつつマスターの顔を二度見、手帳になにやらメモリながら出口へ向かう。

「有難う御座います。カエデさん、キャツシャーお願い。っと伝票」

……。遠くで只野記者とカエデの明るい声のやり取り。警部は耳を傾けている。マスターはコーヒーマーカーの前で仕事をこなす。淹れたてのイタリアンローストの香り。

「料理の皿は下げちゃっていい？警部さん」

警部が食べ終わる頃を見計らって、温かいコーヒーが警部の前に出される。

「ああ、ありがと、カエデちゃん。あいつに変なことされたら、いつでも言うんだぞ」

「ええ？なんかヤバイ人？あのひと、悪いようには見えなかったけど……」

「まあ、なんだ、人を見た目で判断しちゃあいけないんだ。さっきの肉料理みたいにブタの皮を被った牛って事もある」

「・・・変な例え」

「そうだな。うん。で、名探偵カエデ君。感想は？」

「やめてくださいよ、警部殿。私は探偵なんかじゃありませんから」

「まーた始まったよ。警部とマスターの探偵ごっこ……。あ、お会計ですか？有難う御座います」

丸メガネを中指で上げ直すマスター。

細目をより一層細くし、ワイングラスの磨き上げを気にしながら『カエデ』は言った。

「警部殿のおっしゃるとおり。彼を容疑者から外す事は難しいです

ね。
」

（4月15日新聞記事より）

S・Yビルオーナー殺害事件。続報。被害者の身元確認の結果。殺害されたと思われるいた斉藤幸雄氏（56歳）とは別人であることが関係筋より明らかにされる。警察当局は、行方不明の斉藤幸雄氏が事件と何らかの関係があると見て、広く捜索を開始。だが、事件以前の斉藤氏の足取りもつかめておらず。もはや、迷宮入りの様相を呈している。

テイラミスの巻

「ねえ、ねえ、知ってる？テイラミスって『私を元気付けて！』っていう意味なんだって」

カウンターの一番隅のカナ。

「そうだったっけ？」

その隣のシンジ。ワイングラスをもてあそびながら空返事。

「元気出すのはシンジの方ね。食べる？」

そう言つとテイラミスをスプーンですくつて目の前に差し出す。

「いい」

「なに考え込んでんのよ。ずっとそんな調子・・・それに、どうしたのネクタイ。今日は、してないんだ・・・」

「カナ」

「ん？・・・ああ！おいしいー（感涙しながら）やっぱりこのテイラミス最っ高だわ！あ。マスター、スプマンテおかわり」

シンジ、ため息。

「いや、何でもない・・・。・・・ちよつとトイレ」

独り言のようにつぶやきながら席を立つ。

ピーク時のざわついていた店内の雰囲気、ふと気が付くと、人もまばら。ゆつたりとした、やさしい時間に移っていた。

カナには彼が何を悩み、どんな話を切り出そうとしているのか。長い付き合いから察している。

どうせ別れ話だ。

いつか、そんな日が来るのは覚悟している。

割り切った関係。

そう、自分に言い聞かせ今まで彼とつき合ってきた。

けど、手放したくない。彼が別の女と会っていても、繋がりは断ち切ることができない。

負けを認めること。負け犬。絶対にそんなのは嫌だ。

女の意地。

だからわざと彼の前では、元気なフリをする。胸の奥の黒い部分を押し込んで。

最後の一口を食べ終える。自然と涙が溢れてくる。

「ほんと、おいしすぎて。泣けちゃう」

いつの間にか運ばれてきたスプマンテを、一気に飲み干し、

「マスター。美味しかった、ごちそうさま。先に帰ったって、伝え
といて」

急ぎ早に店を出て行くカナの背中に、

「お気をつけて、お帰りくださいませ」

と、マスターの声。

ドアが閉まるのと同時にシンジがトイレから戻ってきた。

警部の捜査記録 その1

遺体発見時刻：4月2日（土）18：00頃

検視結果：鈍器による後頭部頭蓋骨折による撲殺。

死亡推定時刻：3月28日12：00頃から3月29日0：00頃

（時刻に幅がある原因：浴室で、発見時まで水につかっていたため遺体の損傷が激しかった事が原因）

第一発見者：白井 加奈子

28才

（株）イワイ企画 事務員

306号室入居者

：久保 敏^{さとし}

55才

当ビル管理人

101号室入居者

白井加奈子の供述

17：00時頃帰宅（外せない業務があったため休日出勤したとの事。いつもより早めに帰宅）

自宅天井からの水漏れに気づく。

管理人宅へ電話するも留守。

仕方がないので当ビル管理会社で、知人（恋人？）の沖田真治の携帯へ電話。

状況を報告。

4Fオーナー宅を訪問するよう勧められる。また、沖田から久保の個人携帯へ連絡をする約束をし、電話を切る。

*このときの時刻17：14（携帯会社からの通話履歴より裏づけ）

白井、エレベーターで4Fへ。チャイム鳴らす（白井の指紋検出）が不在。

エレベーターで306室に戻る際、なかなか上ってこないため階段で降りる。

3階踊り場付近で上っていくエレベーター内の電気工事士らしき人物とすれ違う。

白井、3Fベランダから4Fベランダを見上げる。（3F、4F、屋上はひな壇構造）特に変わったことはなし。電気もついていない。ベランダ側天井隅から窓際にかけて水が浸水したため。室内を掃除。

17:45頃 合鍵を持って久保、306室訪問。

白井、久保、エレベーターで斉藤宅へ。

脱衣室へのドア付近から水浸し状態。脱衣室の洗面台蛇口、浴室のシャワーが、どちらも流しっぱなしの状態。（浴槽のフタは、伏せられていた。桶に水がためられ排水口を塞いでいる）

白井が浴室に入り、シャワーを止め、桶を退かす。久保、洗面台蛇口しめる。（各所から指紋検出）

ここで白井の携帯に沖田から着信。白井、電話に出る。

久保、脱衣室ベランダ側のガラス戸を開け、水切り等の掃除道具を探し始める。沖田に状況を報告しつつ浴槽のフタを開け遺体を発見する。白井は腰を抜かし、携帯を浴槽に水没させてしまう。

*このときの時刻17:58（携帯会社からの通話履歴より裏づけ）

警部の捜査記録 その2

久保敏^{さとし}の供述

16：45頃に近くのスーパーに買出に出かける。

買い物を終える頃、沖田真治より着信。306室の状況を知る。

(スーパーレジゲのレシート印字時刻17：27、携帯通話履歴17：23)

17：40頃 101室の自宅に戻る。

隣の管理人室に入り、金庫からマスターキーを出しエレベーターで3Fへ。

1Fエレベーターに乗込む際、近藤琢磨(CATV工事士)と入れ替わる。軽く会釈しつつ、近藤、なにやら忙しそうに外へ走っていく。

17：45頃 306室訪問。白井を連れエレベーターで斉藤宅へ。

*合鍵でドアを開ける際、既にドアは施錠^{……}されていないことに気づく。

白井が先入室。

誰かいないか声をかけながら、薄暗いため、廊下、リビング、浴室側照明をつける(指紋検出済)

リビング、浴室へのドアから水溜りができている。その手前ぐらいに落ちていた枯れた桜の花びらに目が留まったと供述。(証拠品No.32確認済)

脱衣室に入り、洗面台蛇口をしめる。

白井の携帯に着信。白井、電話に出る。何を話しているかは、分からなかったと供述。

ベランダ側ガラス戸を開け、管理室倉庫から掃除道具を持ってくると話した。その直後、白井が悲鳴を上げる。

白井が浴室から転がり出るように這ってくる。何事かと思い、浴槽を覗き、遺体を発見する。

事件性を感じ、まず、警察に通報することを考えたと供述。

携帯を自宅に忘れたため、一度自宅に戻ることを白井に説明する。

次に、事件現場を荒らさないよう。放心状態の白井を抱き上げ、極力何も触らないように、玄関外まで白井を運んだ。

白井に、一緒に来るか尋ねたが、しゃがみこみ、首を横に振るだけだったので、仕方なく、すぐ戻ると伝えてエレベーターで1Fへ。途中、エレベーターが2Fで止まり、近藤が乗込む。

近藤が『どうかしましたか』と尋ねてきたので、事情を説明し、同行してもらえないかお願いした。少し考えた様子だったが、近藤了承する。

警察への通報時刻：18：14（久保の自宅固定電話より）

警部の捜査記録 その3

事件当日（4月2日）の事情聴取記録

近藤 琢磨^{たくま}

（32才）

CATV会社「M・シティケーブル」所属の工事人

4月1日にS・Yビルの地デジ化改修工事施工後、202室住人からテレビが映らないと連絡が入り、点検のため訪問。（白井が供述するエレベーター内で見かけた人物と一致）

訪問時刻17：00前後

（202室住人：澤村さおり（41才）と、その娘：愛^{まな}（3才）から確認済み）

澤村宅の液晶TV、デジタル放送受信できず。

TV端子口からの電波レベルに異常はなかったが、念のため屋上にあるTV共聴盤内の点検をするため、管理人室を訪問。

*（屋上へ出るには久保が管理する南京錠のカギが必要だった。4月1日の工事の時、久保が立会い、屋上へのドアの南京錠を開錠したのは久保であった）

1F管理人室と隣の101室久保宅どちらも不在。

だめもとでエレベーター最上階の4Fまで移動。（3Fで白井に見られている）

階段で屋上へ出るドアへ。

しかし南京錠は施錠されていた。（近藤の指紋検出）

近藤、仕方なく202室へ戻り、TV配線、初期設定等の点検をする。原因はケーブル接続部分の接触不良によるものと判明。補修するための部材の用意がなかったため車まで戻る。（この時1Fエレベーターで久保と入れ替わる）

S・Yビル正面むかって左側に、手前1台、奥に2台収容可能な

コインパーキングあり。作業車は奥の右側に駐車。後部ドアを開け、必要な部材を用意し、202室へもどる。

作業を終え、澤村さおりから完了書のサインをもらう。(完了書に記載されている時刻18:00)

2Fエレベーターで久保と同乗。様子が変わったので声をかけた。事情を説明され、一緒に付いて来てほしいとお願いされる。

一度荷物を置きに行きたいと久保に申し入れ、作業車でタバコをふかしながら、携帯で、CATV工事課に作業完了報告をいれた。(携帯履歴時刻18:15)

近藤、管理人室のドアを叩いても、返事がないので4Fへ。久保と白井に合流。

現場保全のため、この場で待機していたほうがいいと提案し、警察到着まで斉藤宅の前で待つ。

近隣の交番警官の現場到着18:30頃。

質問

・気づいた点
特になし。

4月4日再聴取した時

ビニールテープ(黒)を事件翌日に、無くしたことに気づいたと供述。当ビルで落としたかどうかは釈然としない。

4月1日の工事の詳細

管理人〃久保、CATV工事の事前説明は管理会社より知らされていた。

13:00工事開始予定。近藤、時間通りに訪問。

久保と近藤、この時が初対面。

屋上のドアの南京錠、久保が開錠。

近藤、屋上TV盤内のブースター交換工事から始める。

久保、作業が終わったら声をかけるよう近藤に指示。管理人室に

戻る。

近藤、屋上作業後、各フロアーの分配器等の系統点検のため、4
Fオーナー宅入室許可を久保にお願い。

久保、斉藤宅を合鍵で開錠し、立合う。

（分配器は1、2階フロアー分は2階TV盤内、3階分は3階T
V盤内、4階分はオーナー宅のみで、宅内に取り付けてあるため、
入室する必要があるという）

前日にオーナーから久保の携帯へ

『例によって留守につき、明日の工事の立会いは、久保さん願
いします。忙しいとは思いますが・・・』

というメール。斉藤宅は不在の時間が多く、しばしばメールでこ
のような依頼があるという。

脱衣室の天井に点検口があり、近藤、脚立を作業車から持ち出し
て点検口をあける。

空けたとたん、屋根裏から黒いバッグが落ちてきた。その時、久
保も驚いた。

近藤あわててバッグを元に戻し、作業に当たる。久保と近藤、バ
ッグの中身は見えていない。が、気づかなかったことにしようと久保
が提案、近藤了承する。

久保、空気の入替えのため、ベランダ側ガラス戸を開ける。それ
以外には、物に触ったりしていないとの事。浴室のガラス戸は閉ま
っていたため、特に不信な点はなかったと両者とも供述。水道の水
も出ていなかった。

*（久保、桜の花びらについても、その時点ではなかったと供述）

久保、作業完了後、斉藤宅戸締り確認し、施錠。屋上へのドアの
南京錠も施錠。

近藤、久保から完了書にサインをもらう。

完了書の記載時刻 15：45

クアトロフォルマッジオの巻 その1

「・・・」
「・・・」

マスターと警部。お互いカウンターに置かれたノートに目を落としましたま。

カエデ、手を腰に当て、口をとがらせ、

「・・・っもー。マスター！ちゃんとヴェヴァンダ閉めて！仕事の手が止まってるっ」

現実に引き戻されたマスター。頭をかきながら、

「警部、申し訳ございませんが・・・」

「そうだな、また邪魔させてもらうよ。工作中失礼した」

警部が席を立つ。気が付くと客席に人はおらず、警部だけが一人、時間の流れから取り残されたようだ。

「いいえ警部、あと10分ください。そうすれば、カウンターも問題も整理がつきますので。ああ、それとあと一点。桜の花びらはもう一枚検出されたと伺いましたが？」

「ああ。その通り。鑑識の調べで、桜の花びらは2枚検出された。

もう一枚は散ったばかりの新しいやつだ」

「なるほどです」

4月10日PM11:30

マスターは仕事をかたづけ、キッチンへ引っ込んで行く。

カエデは、外の照明を落とし、ドアのプレートを裏返し『C110 see』にすると、

「警部さ〜ん。ラストオーダーですが〜？」

警部、手だけで返事。

「ありがとうございます〜」

今度は、キッチンに顔だけ突っ込んで馬鹿にでかい声で、

「ラストオーダーです！お疲れでしたー！」

すると奥から、明るい、威勢のいい声が帰ってくる。

カエデは、レジの前に立ち、伝票を数え始めた。

マスターがキッチンから現れ、カエデになにやら声を掛けている。

「もう！そうやって、いつつも食べ物で釣るんだからー」

どうやらキッチンで、まかないを頼む段取りをつけてきたようだ。

「ご協力感謝します」

とマスター。

「はいはい、名探偵さん。早く真相を暴いてくれたまえ。でなきや本業に差し支えますから」

「・・・私の本分、学生なんですけども・・・」

「キッ！・・・あ、マスターは？なんか食べる？」

「そうですね。それじゃ・・・」

「警部殿、シェフにOKいただきました。30分早く上がらせていただきます。カウンターではなんですから、こちらで話しましょう」

そういつてマスターは自分のお冷を片手に持ち、シート席に座る。もう片方の手には、A4の白紙とボールペンを持っている。もうすでに、カウンターに佇んでいたバーテンの『マスター』の顔ではなく、難問の解を、夢中に求める学者の顔になっている。

クアトロフォルマッジオの巻 その2

「まず警部殿、確認したい点がありますので、質問よろしいでしょうか？」

警部は、黙ったままうなずく。

「4月1日に、久保氏と近藤氏が発見したと言う黒いバッグ。遺体発見時、オーナー宅の点検口から見つかったんでしょうか？」

「いや、見つかっていない。分配器、点検口の内側から近藤の指紋は出てているが・・・」

「なるほどです。それともう一点、屋上に続くドアの南京錠ですが、ピッキング等によるこじ開けた痕跡はなかったんでしょうか？」

「実のところ、その痕跡はあった。久保に聞いてみたところ、気がつかなかったそうだ。いつ付いたものかは不明だ。ただ、南京錠自体は、新しい。もともとの古いものが3月上旬頃、壊れていたのを久保が気づいて新しいものに交換したと言っている」

そこまで話し終えたところで、名探偵力エデは、白紙になにやらアルファベットの文字を使った数式を書き込んで、

「警部殿、今のところ被害者についての情報が余りにも少な過ぎます。凶器も斎藤氏宅の鍵も今だ発見されず。争った形跡もない。犯人は、犯行の痕跡をうまく消している。私は、この事件において利害関係、怨恨の線を今の情報量からアプローチするのは至極不可能に思います。また、被害者は犯人と何らかの繋がりがあったと思われるフシがある。警部が今回、私にこの事件の話を持ち込んだのは、のっぴきならない事情があるのではないんでしょうか？」

警部。凶星を当てられ、ぐうの音も出ない。

「いやまいった。そこまで読まれているのならば、話さないわけにはいかん・・・」

そう言うと警部は、被害者『斎藤幸雄』という人物が架空の人物であった事実を打ち明けた。

この事実を知っているのは、極少数の警察関係者だけであり、この事実が下手に公表されれば、警察組織に対してのいい批判のネタになる。痛恨の初動捜査ミス。

「マスター。まかない出来たよ〜っと」

そう言いながら近づいてくるカエデ、

「クアトルオ・フォ・ルまあ・ジヨ！おっ待ち」

ピッツァ皿にのせられた熱々で湯気がまだ上がるピッツァ・クアトロフォルマツジョ。テーブルの上にドンと置かれる。ピッツァの具は四種類のチーズのみというシンプルなピッツァだ。

「グラツチエ、カエデちゃん」

「どういたしまして」

「なかなかうまそうだな。このピザ、チーズ以外に何がのっているんだ？」

「やだなー警部。このピザはね、四種類のチーズをのせて焼いたものなの。チーズそのものの味を楽しむんだから」

「ほー。そんなに種類が入っとるのか。では青いのはブルーチーズだな」

「その通り〜。ゴルゴンゾーラに、タレッジヨ、チエダー、モッツアレラ！」

「アルファ、ベータ、マックスに管理人」

クアトロフォルマツジオの巻 その3

「警部殿、いいですか。『斉藤幸雄』と名乗っていた被害者『？』
に対して、？を殺害した犯人を^{アルファ}とし、遺体を発見させようと斉藤
宅を水浸しにした人物を^{ベータ}とします。そしてまた、黒いバッグを持
ち去った人物。それを^{ガンマ}とします。その時、いくつかのケースが考
えられます。

ケース？ || ||

ケース？

ケース？ || ||

ケース？

ケース？は、すべて同一人物の行った一連の事件ということですが、
このケースをを考える時、自ずと『なぜ犯人はこんなまどろっこし
い発見のさせ方をしたのか？』という疑問に突き当たります。非合
理的です。殺害後、バッグを持ち出し、逃走すればいいわけでは
ら。心理学的にも、行動科学的にも、この数式はありえない」

「無論だ。カエデ君、犯人は発見当日にはもうとつくに逃走してい
る可能性が高い。そう考えるのが妥当。発見当日の供述記録に、手
掛かりはあまりないんじゃないか？」

マスターは、早くも一ピース食べ終えると。

「そうとも限らないですよ、警部殿。もちろん、その可能性も視野
に入れるて考えてみたのですが、納得できる『形』から外れた行動
パターンが気になってるんです。まあ、確証と言えるほどのもの
ではないんですが……。この事件が複雑に思えるのも、その点に
あるのです」

そう言つと、もう一ピース食べ始める。

頃合いを見計らうようにカエデがやって来る。

「ねえ、ねえ。警部さん。そろそろ、お会計おねがいできます〜？」

「おお！もうそんな時間か。すまんカエデちゃん、じゃあレジまで

行くっ」

マスターは、いつの間にか残り2ピースまで食べ進め、手が止まる。

「三人、いや、二人のうち、どちらかが『？』を殺した！警部殿！」

ピアット・ウニコの巻 その1

「ペルファボーレ！カエデ！ウニコ、デュエ！」

「グラッチェ！オカミさん！」

従業員カエデ、赤鉛筆でチェックを入れ、ウニコ皿二枚を軽々片手で持つ。

「あつ、マスター。6番アップ、グラッチェ」

バーテン姿で黒いロングサロンを巻き、両手に持ちきれないほどの空いた皿を、涼しげに運ぶマスター。カエデにウインクする。が、目が細すぎるため、奇妙に片側の頬がひきつっているようにしか見えない。

「・・・ハハ（ウケる）」

カエデが、料理を運び終えた時、入口のドアの鈴が鳴る。

「いらつしゃいま・・・あ~~~~久しぶり〜。マナちゃん、マナママ〜！」

「カエデちゃん久しぶり、元気そうね」

「かでで、し〜ぶりー！」

「マナちゃんも！また大きくなった？」

膝を抱えてしゃがみ込みマナをなでる。マナは笑顔で、エへへと答える。

「シエフは？来月お願いしますって、言おうと思って」

「そっかあ、もう来月なんだー。ごめんなさい。シエフ、今日式場なの」

「そう、相変わらず忙しそうね。じゃあ、今オカミさん？」

「ペルファボーレ、カエデ！料理あがつたよ！」

噂をすれば、キッチンから威勢のいい女性の声がかかる。カエデは肩をすぼませ、

「そつなの。今、一番奥のテーブル空いたから、そちらにどうぞ」

細長く狭いキッチンでは、二人がすれ違いうのがやっとの場所で、三人が並んで作業している。

火口を担当している「オカミ」はシェフの奥様で、この店で一番の男前な性格の持ち主。シェフとは料理学校時代からの間柄というだけあり、料理の腕前はシェフに引けを取らない。

オカミは、伝票を確認しつつ、フライパン二枚を片手で持ち、オリブオイルをレードルですくい、

「おいしい、バイト君。生きてる？後（オーダー）二枚こなせば、一息つけるから」

「ひく。まだあるんですか？」

そこに料理を取りに来たカエデ、

「ご新規二名様、ご来店ですす！」

「ババーネ！」

「ば、ババーネ（ひく）死んじゃう）」

イタリアンレストラン『バッカルネ』の日常。ランチタイムは後半戦に差掛かる。

4月9日（土） 14:30

会計を済ませた客は、ドアのベルを鳴らして出て行く。キッチンから聞こえるオカミの声も無くなりつつ・・・ふと店全体が、時間の針を緩める。

マスターはいつもの場所に立ち、食後の伝票を眺めつつ、ドルチエ皿にソースで絵を描いている。

カエデはお冷の入ったピッチャーを片手に持ち、6卓に近づくと「かでで〜、見て見て〜」

無邪気に桜の花びらの付いたブレスレットをマナは、自慢げにカエデに見せる。白い糸で一枚一枚花びらを通した手作り。

「わー。いいじゃない。マナちゃん」

「でも、桜はすぐに枯れちゃうから。あんまり振り回すと取れちゃうよ。もう散らかっちゃって・・・」

そう言つて、シートに落ちた花びらを一枚一枚拾い集め、ティッシュで包む母親。

「ちょうど今見頃だから、ほら、例の事件のビル。私、そこに住んでんだけど、あの裏手に小さい公園あつて、よく行くのよマナ連れて。あそこの桜ね、もうだいふ咲いてきて、散り始めぐらいかな！散り際つて、ステキよね」

「わかるー。・・・つて、マナママ！今さらつと怖い事言わなかつた？例の事件つて・・・」

「そう、オーナーが殺されちゃつたビル」

「さつじん〜」

「こら、マナ！まーたく、どこで覚えてくんのかね、この子は」

「ええ〜！そうなの？だつてまだ犯人見つかつてないんじゃ・・・怖くないの？」

「そうねー。よくよく考えると。ま、でもあんまり深く考えない夕子だから。それに、本物の刑事さんがきて、聞き込みつて奴？なんかどきどきしちやつた。あーゆうのドラマでしかないじゃない？私、好きなのよねー。サスペンス劇場！」

「マナきらい。ねるじかん」

「そうよ。怖い怖いよ〜」

マナママは、マナに顔を近づける。マナは怖がらず、キヤツ、キヤツと喜ぶ。

カエデ、少しほつとした気分になり、お冷を足して、

「食後のデザート、持って来ますね」

一礼した時、入り口のベルが鳴る。カエデは、誰が入ってくるのか、予想がついていた。

「いらしゃいませ」

（やっぱり北ジイだ）

「いつものお席でいいですか？」

そしてカエデは、カウンターの方向を向きかける。が、北ジイは、誰かを探している様子で、

「いいえね、今日はね、澤村さんとのマナちゃんと待ち合わせるんでね」

まん丸顔のしわが、くしゃくしゃになるほどの笑顔で、嬉しそうにそう応えた。

ピアット・ウニコの巻 その2

桜華大通り沿いの一本裏道、S・Yビルのちょうど真裏に、名前もない小さな公園がある。砂場と鉄棒。ベンチが二つだけ設置されている。

隅には桜の木が一本植えられており、うまい具合に日が入るので早めに桜も開花した。

北村写真館は、その裏道をずっと真つすぐ行った突き当たりの、商店街通りに出た角にある。

北じいは、その初代館長。カメラマンであったが、今は隠居し、息子が後を継いでいる。

自慢のカメラを手に、近所を散歩しては、所かまわずシャッターを切るジイさん。巷ではちよつとした有名な人である。

散歩コースは日によってまちまちだが、最近のお気に入りはスポーツが、小さな公園の桜の木らしく、足しげく毎日通い、桜の変化を写真に収めている。

公園は、人の気配がほとんどしないのだが、澤村親娘だけはそんなところが気に入っているらしく、日中ひなたぼっこをしによく出てくる。

北じいは、マナが桜に向かって両手を一生懸命伸ばしている姿を被写体として納め、モデルのマナに写真を焼増しする約束をし、今日バツカルネで待ち合わせた。

「マナ、ちっちゃーい」

写真を渡されたマナの第一声。

桜の木がメインに写された写真。マナは両手をいっぱいにして大の字になって対象的に写されている。

「こっちはね、マナちゃんメインで撮ったやつね」

「わあ、キタジ、ありがとう！」

マナはその写真を小さな手で抱きしめ、カエデの元に駆け寄る。

「カエデ、見て見て。」

「きゃー！可愛く撮れたね。いいな。マナちゃん。」

「エへへへ。」

自慢げなマナ。が、すぐに目の色がかわる。

マスター、マナが大好きな木苺のタルトとコーヒーを持ってテーブルに向かい、

「北さん、お待たせいたしました、『いつもの』でございます。」

そう言ってマスターはコ・ヒーを北じいの前に置く。

マナはすかさず、元いたテーブルに着き直し、マスターに満面の笑みで待ち構える。嬉しくてパタパタ振る尾っぽが見えそうだ。

またマスターも細目をより細くし、マナに微笑む。

少しの間がお預けをくろう犬よう、

「木苺のタルトをご注文のお客様。」

「はい。あたしあたし！」

マナは目を輝かせながら手を挙げる。身に付けていた桜のブレスレットの花びらがまたヒラヒラと舞う。

「マナ。食べる時はそれ外しましょうね。」

そう言いながらブレスレットを外そうとするマナママ。

「手作りですか。いいですね。この写真の桜ですか？」

マスターは写真を一枚手にとる。

「そう、その桜。二三日前から散りはじめてね。マナがビニールに入れていっぱい集めたから、作ったの。ね。」

口の中をモグモグさせながら、鏡に写したように母親の首を傾げるしぐさにシンクロナするマナ。

名探偵カエデ、写真を見つめたまま、表情は笑顔のまま右眉を一瞬だけ上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4439s/>

ディナータイムは後半戦に差掛かる

2011年10月5日07時24分発行